

老の草環

上







老の草環

極老朽廢聲且足蹙て門外一歩も進み庭前の塵高第きかゝる微の  
 餘喘を保て蠢々蛆の如く樂する憂する音ふる或思想は老す朽び三伏の夏  
 の日永机上の徒然夢現ともなす空蟬の八十の伴緒ふと手繰り初むきは古き  
 むらうの千糸万緒の如く時々の節々ゆりゆると目前に現これ来り無為有流  
 轉輪廻の廻燈籠人知らぬ己か興味の面目に教養かか今や猶も杓子も高  
 き賤き押並て海山遠く山姿水明に避暑の樂に有頂天界也と風聲の  
 負老は不動不勞無貴獨樂突飛の避暑地を豪遊一番をん益々手繰り出  
 中古草環十五春秋内十年八空寂々切捨つ後を七十五年其延長天も  
 届く(き)小草環とて絹綿麻葛の各種のり太糸細糸屑糸節糸継糸汚  
 糸のり染色紡績の拙悪醜陋千差万別己も呆れて物も(び)其謂れ因縁  
 白状せれば地震雷火事親父無論病難厄難損難貧難祓難盜難難數就  
 び伊勢七度熊野三度八朝飯前日本の果から果朝鮮の果近歴巡りて士た  
 る三十二年高たり工たる十五年農たる十年人間の階級普く實踐此間常狂  
 瀾逆浪と戦ひ頑強不屈三陟三點或は談証と暮る熱湯と浴ひ或は昇  
 坑に陥らば既祖上の牲とめん(き)或は田天動他の變り會ひて生死の間を狂  
 奔わゆる世の辛酸苦楚と音て七轉八倒而るも事々物々坎墮蹉跌軋軋  
 不遇相躡他中畢竟頑鈍愚昧の致せ所今更後悔先ん立慙愧身  
 と措く處を此失敗系と悉く屑糸と御座り出されは強て手繰らん(き)も  
 十重廿重に纏れ糸れて纏結乱脈捨も蘭糸の自縛糸爪の海綿状線(き)の如  
 く縋る(き)方々(き)解く(き)術あり(き)一刀寸斬の舟を(き)依て此切(き)の屑糸と除  
 き罷り敷も知る(き)幼稚時代の無垢糸と老後世舟人と(き)悠々閑々慶  
 しの捨小舟流寄る(き)邊の手に(き)搔き集めたる薄草草丈と世有弱れ  
 たる(き)圖画寫真(き)類と(き)微臭くて面白(き)か(き)取捨唯世は普く知れ(き)る  
 目刻り(き)興味(き)らんや(き)思(き)ふ(き)の(き)手繰り(き)草環の臍巻と(き)あ(き)る(き)卷  
 子(き)内(き)虚(き)環(き)の(き)如(き)く(き)内(き)實(き)ハ(き)か(き)ら(き)る(き)の(き)空(き)虚(き)畫(き)の(き)実(き)際(き)正(き)銘(き)の(き)見(き)取(き)圖(き)ホ(き)ン(き)チ  
 画(き)と(き)想(き)を(き)は(き)幾(き)分(き)の中(き)実(き)ま(き)か(き)ん(き)更(き)三(き)画(き)法(き)を(き)知(き)る(き)自(き)分(き)流(き)の(き)無(き)手(き)法(き)百  
 も(き)兼(き)知(き)草(き)の(き)夏(き)と(き)冬(き)と(き)獨(き)樂(き)自(き)娛(き)の(き)手(き)遊(き)び(き)人(き)の(き)誰(き)笑(き)ハ(き)吾(き)閑(き)を(き)可(き)々

草環のほどおぼろくして保るるのふ(き)やを(き)り(き)笑(き)ひ(き)つ(き)け

大正六年八月

八十五 呆然戲誌



附言圖面今白なきもの(き)圖解と別紙よりの也



西苑圖解

西苑ハ元紀別侯江戸赤坂本邸の花園也此邸ハ赤坂青山較橋四谷堀  
端通三廻り裏廣十四万余坪殿諸局家臣長屋の外ハ悉く庭園ニ属し山岳  
深林池沼溪谷皆天然の勝景凡致ニ任じ規模廣大毫も園藝棄駄手  
細工の跡も一是他ニ類なき特園とい内苑ハ名勝十ヶ所ありも縦覧と得る外  
苑ハ名勝六十四ヶ所あり悉く記すべし於老爺ハ此邸内字丸山ニ生長春秋ニ縮  
荷社秋葉社の祭事有て家中十五歳以上の男見残ら入苑遊覽と許され廣  
芝とりの於て君公放鷹鳥及び由投げ物と終り君公初侍臣等密掛包菓子  
と投げ捨てるもの思童等ハ七轉八廻但んづほこれ狂気の如く争ひ拾ひ鬼  
の首取り如くに踊躍歡喜年中最大の快樂事と子供ハ樂々事今も心  
まにされバ外苑ハ隈なく暗記は存り也

維新後明治五年六年兩度同邸者皆宮内省職納まり爾後假皇居ニ定火  
給ふ後年觀菊の御宴御恒例となり大官初拜觀の幸ありも資格なき者は  
不可能假令拜觀せりも禁苑と憚り撮影はかく故新聞紙中も現存し今も  
目星多し物代ノ紀人別々此園を知者ハ今老爺一人とあり天下の名苑  
として世傳へさるハ本意を以概況の畧とすたり保一五十年余の昔遺  
志を免れされとも大差なき以信也

宜春觀

字丸山とうま在り二虹梁より左山下搦水逕よりと傳ふ途中西行櫻西行の井  
つり往昔錦倉街道たり時の古跡傳ふ尚此を行左方山に登り宜春觀と題  
する大樹に到る宏壯巍然たり此邊對岸の山と共々皆櫻樹弄花苑と稱し花  
時爛漫の花芳山嵐峻より類を遙ニ松林と望み九重の塔傑身、画圖の如し  
觀魚亭 青藍沼ニ臨む水亭朱欄碧檐支那風ニ擬し画舟と繫く青藍  
沼ニ兒ケ閣より水涯ふりて瑠璃の如し昔昔童謡て多し濃しもの名を傳へり  
丸山と下り密林青苔滑る小逕と行くに古封埃あり錦倉街道の一里塚の其  
儘存する也土封上、檜の大本、近年既朽て伐り株を存し新樹を植へらむ支り鎖  
翠溪の小逕と迂曲山に登れば望雲亭に出づ亭と雖も唯九尺四方許の露路基  
まで小児の手をも自由ニ回轉せ故に廻りの御腰掛と稱し傍に曇暉石より二尺  
許の小石にて平面黒色光澤水と灌け水面を寫せ仍て鏡石と呼ぶ露臺と  
共に一興なり

二虹梁其他

丸山債きの山下二虹梁より擬賣珠欄子の長橋二重ニ架む奇勝清雅愛  
まじ橋の袂に満洒の小亭あり燕の御腰掛あり柱聯は燕と画く傍に柱取  
穴と穿ち石燈籠の如き石まつ穴ニ身とありてハ響きありてゴリ石と呼り  
是より直線の坂路と凌雲道より丸二西許九右百尺の長松森々蒼翳天と



掩ふ凌雲名を得る良し中途柴門を設く袖垣、紀州熊野産の黒文之木香を気芬々たり山上の左方望嶽亭有り圓窓の正面手執る如く富嶽を望み最も奇勝なり是より右に直ちに廣芝鳳鳴園に到る

風昔山嶺稻荷社有り山下と雲英沼と云毎年二月初午に稻荷祭有り各家中の幼童入園放鷹鳥密拵投の園遊ある事前記したる如し秋葉社に鎮火祠と唱へ置翠翠丘の上ありとも今所在胡亂されど掲げしや凌陰洞に林樹鬱蒼蒼滿山苔深き處御堂とハ世世の靈廟と君直拜の處千駄谷境妙寺と云寺僧日々来て勤行と堂守坊主守護せり山下清涼夏尚寒き処二三の氷室有り毎歲六月朔日幕府大奥に献上の氷雪と出ると又此辺何百年とも知らざる老藤あり高き數十丈大本ままつこり條蔓龍蛇の如く奇觀なり溪間在る園現難長生村に凌雲道の下に在る水田數百頃茅屋園丁の百姓居住耕耘くまきそそ用杯のれと建て田舎の光景真に迫る水田の一方山下流巡り流山吹叢生花時黄金の波とらつ雅愛と云

鳳鳴園

園中の最高崖にて中央に位一芝生と映階碧と稱す園宏壯第一を殿館三齋一放鷹投物事の事園記より如し高接近の裏手に鷹部屋有り鷹鳥近常住て各控の鷹を飼養す此高崖と下て田屋敷といふ至る敷橋の口は菴菜園教町有て菜根類と多産せし之と過ぎて九十間馬場と賭射場有り家中の騎射槍術を閑覽の處と此上は鳥籠部屋有り鷹孔雀各種の小禽數百羽を飼養す

白虹臺

鳥籠部屋より順路此臺に登る亭と龍の御茶屋と稱す老松鬱陰奇岩怪石磊砢の間飛瀑懸り流れて凡そ秋と多山楓樹多く秋季錦繡を織り總して秋色の凡致に富あり温泉の下流杜若洲と名杜若多しや隔て五里香河の水田及び池沼有て放鷹地なり入堀を設け冬季鳥見後時餘飯以て飼ひ自とす幾千羽の鴉雁鳧鴨飛來群集す此の邊ハ西苑順覽の終焉處と吾辰紀の園坂下の内都と本殿の下に當れり

右の外北苑と稱する今昔山練兵場東部内に當る向陽亭と稱す小亭及び大樹の枝垂櫻有り此苑ハ園藝趣味を主として豪駝師居を構へ大小百種の盆栽罽毼の花井園との名石珍岩羅布一備はさるる都下屈指の園藝師も不可及の觀有り又是も東南の地に儲香園と稱す梅林及び植物園有り到底詳記せざるを總て規模の宏壯周到以て想ふに足る故に將軍家も屢台臨日光法親王亦御臨觀西回あり縁故あり諸侯幕臣請求に依て參觀甚なりハ林峯園大(學頭)ハ西園賞景と題したる詩文を送呈或る文雅の士ハ柴折の記と不勝景女の詠歌文章を捧けたり



宜春觀

九山の御茶  
屋と云ふ



虹梁

西行櫻

観魚亭

青藍沼

西行井

古封塔

皇雲亭

壺睡石

鎖封溪



二虹梁其他

陵雲道  
紫門

望山嶽亭

長生村

凌陰洞  
御堂

風音嶺  
稻荷山云

燕居亭

二虹梁

黄金溪

社荷稻





鳳鳴園廣芝  
於放鷹投掛園遊

毎歳春季稻荷祭  
秋季秋葉社祭の節  
家中の子節十五歳以  
下の童如入園と并  
君公放鷹且密  
林と投げ童子競  
拾ひしる恒例と云  
君公及び侍臣、駿  
伊達羽織と着園中  
故二同小刀の帯り



鳳鳴園

園中最一在廣の亭樹と云  
前面ハ一万坪余の平原芝生  
俗ニ廣芝と稱し老木の枝垂  
櫻と新と矮松傘松點々存  
の

弓術射的場



白虹臺  
滝の御茶屋云

五里香  
放鷹地

入城

杜若側

風字沼

